

初対面の雑談における連鎖構造分析

—部分的報告からはじまる連鎖構造を中心に—

張良光*

(e-mail : kwang-kana@hotmail.com)

<目次>

- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 1. はじめに | 3.1. 分析資料 |
| 2. 先行研究 | 3.2. 分析方法 |
| 2.1. 初対面の雑談の研究について | 4. 分析結果および考察 |
| 2.2. 部分的報告からはじまる連鎖構造について | 4.1. 部分的報告からはじまる連鎖構造について |
| 2.3. 日本語母語話者の会話スタイルについて | 4.2. 言語形式について |
| 3. 分析資料および方法 | 5. おわりに |

キーワード：初対面会話(first meeting conversation), 雑談(chat), 連鎖構造(sequence organization), 部分的報告(partial information), 母語話者(native speaker)

1. はじめに

初対面とは、お互いの情報が著しく少ない状況であり、話し手は相手に情報を求めたり、あるいは自分の情報を相手に与えたりし、情報のやりとりをする。このようなやりとりによって得られた情報が、会話参加者が共有できるものであれば、会話参加者の発話が増え、会話は弾む。一方、そうでない場合は、情報を持っている人から持っていない人へと、話が一方的に進むと考えられる。したがって、初対面での情報のやりとりがどのようにして提示され、それをまたどのように展開させていくのかといったことは、非常に重要なものだと考えられる。また、初対面での印象は、その後の人間関係に影響をおよぼす。つまり、初対面での会話のやりとりを円滑に行わなければ、悪い印象を残すことになる。そのため、話し手は答えやすい話題を提供したり、聞き手は差し障りのない受け答えやあいづちをうつこと

* カトリック大学校, 招聘教授, 日本語教育。

もある。

自由な会話というイメージが強い雑談は、勧誘や依頼のような課題遂行といった性格を強く持たない会話であり、意図的に、あるいは意図に反し、話題を推移させているように見える。しかし、雑談は無作為に話題を展開させているとは考えられない。望ましい話題があれば、避けられる話題もあり、避けたい話題があれば、話題をそらしたりもする。つまり、雑談にも規範や規則が存在していることを意味している。

そこで本研究は、初対面というお互いの情報が少ない中での雑談に焦点を当て、その会話の規範や規則を構造的に明らかにするため、連鎖構造をみる。連鎖構造とは、発話一つ一つを重ね、それが積み重なったものをさす。また、連鎖構造には質問からはじまるものや、意見のような質問からはじまらないもの等があり、この連鎖構造から規範や規則を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

2.1. 初対面の雑談の研究について

会話の入り方や話題転換の仕方、トピック(話題)の構造、会話のストラテジーなどについて考察したりする研究として、エスノメソドロジーの会話分析がある。分析方法として、人びとが日常的に行なっているやりとりがどのように成り立っているかを観察・記述し、その仕方、その実践を研究していく。その分析対象となる会話には、勧誘、依頼、問題解決といった課題遂行といった性格が強いものと、雑談のように課題遂行といった性格が弱いものがあると考えられる。前者の構造面での研究は、多くの研究が挙げられる一方、後者の構造面での研究は管見の限り少ない。その要因として、前者には明確な到達目標があり、それに向かってある一連の行為が一定の順序で展開するであろうことが容易に想像されるのに対し、雑談とかおしゃべりと言われるものはどこへ向かってどんな風に展開するのか予想がつかない、いかにも取りとめがないという印象があるからであるとの指摘がある(大浜 1995:207)。つまり、明確な到達目的が見えない会話である雑談は、構造化するのに困難な会話であると言える。実際に、雑談の構造分析を行った筒井も、雑談を「目的の明確な課題遂行型の会話とは会話の意義や話題の性質、会話参加者の役割などに関して、異なる特徴を有する」としている(筒井 2012:6)。

また、雑談は情報伝達の道具であるだけでなく、人間関係の構築に重要な役割を果たす。このことから、雑談がどのような発話のやりとりから成るのか、その際にどのような言語形式が用いられるのかという問題意識から、積極的に雑談の構造と言語形式に取り組んだ研究として筒井(2012)がある。筒井は、構造の面と内容の面という二つの側面から、雑談の分析を試みた。2人から4人の親しい関係の組み合わせを男女の割合関係なく10組作り、自由に会話をしたものを資料として扱い、雑談の構造として、話題の中に見られる発話機能の連鎖について分析を行っている。その結果、雑談の中には30種類の連鎖構造があることを明らかにした。また、初対面の雑談において連鎖構造を話題と見立て、その話題の対象について研究を行ったものに張良光(2015a)があり、初対面は質問からはじまらない話題も少なくないことがわかった。話題の対象を調査した結果は、質問からはじまるものは「会話参加者」について話されることが多く、意見からはじまるものは「会話参加者」と「事柄」について、そして共有していることから始まるものでは「事柄」について話される傾向が見えた。つまり、話題の対象によって選ばれやすい連鎖構造があるということがわかった。そして、初対面の雑談の質問からはじまる連鎖構造について研究を行った張良光(2015b)では、第三発話に「理解」が表れるものと「評価」が表れるものに差が見られた。¹⁾

これらの張良光の研究は、初対面の雑談の話題と質問からはじまる連鎖構造にとどまり、質問以外からはじまる連鎖構造についての言及がない。

2.2. 部分的報告からはじまる連鎖構造について

初対面は、対人関係構築の上で、避けては通れない誰もが通る入り口である。したがって、ここでどのような印象を残すかによって、その後の対人関係に影響が現れる。そのため、初対面、特に年齢の差から生じる文化差や環境、性別や地域など異なった人とのコミュニケーションには、不安がつきまとう。その不安は、相手からの情報によって解消されたりすることもあれば、危険と判断されることもあり、どんな情報をどのように伝えるかといった問題がある。したがって、初対面での会話はこのように緊張と不安を感じながら、それを軽減するために、お互いの情報を交換していくという対処をしながら会話に取り組んでいくものなのである。

この自分自身の情報を開示することを自己開示(self-disclosure)といい、本研究は、

1) ここでの「理解」とは、単純に提供された情報を受け取ったという意味であるものであり、例として、「うん」「はい」「ええ」「そうですね」等が挙げられる。一方、「評価」とは、提供された情報に対して、単にその内容を理解したことを示すのではなく、その情報に対する関心や驚き、意外な気持ちなど、その情報の理解以上の評価的な判断を表すものであり、例として、「すごい」「おもしろい」等の評価形容詞があげられる。

これを「相手の情報を収集する方法の一つとして、自ら自分自身について相手に話すことをさし、自分自身の情報を他者に対して示していくこと」とする。つまり、質問のような情報要求とは違い、話し手自身の持っている情報や意見、評価を聞き手である相手に伝えようとする発話によってはじまるものとする。代表的な例として、情報提供、語り、意見提示などが挙げられ、自己開示を質問という、相手から自分の知らない情報や意見を引き出そうとする発話との対比において捉え、話し手自身が選択した話題内容を自発的に聞き手に提示する発話をさす。

適切な自己開示は、より良い人間関係の形成と維持に必要なものと考えられる。一方、不適切な自己開示は相手に否定的な印象を与え、対人関係の構築の障害になってしまう恐れもある。話し手自らが、聞き手に何かを知らせようとするのは、質問のような聞き手が求めている情報を知らせるのと異なる。常に話し手自身の話そうとするものは、聞き手が聞きたいと思ってるものなのかどうかということが、あらかじめわからないためである。そのため、話し手は、聞き手が話そうとすることに興味を持つのかどうかということをモニターしながら話し始める必要がある。これについて、私事語りの開始において行われる語り手と聞き手の相互のモニターのやりとりについて論じた串田(2006)が挙げられる。串田によると、私事語りという、私的な経験を語る行為においては、語り手は、聞き手が自分の私事語りに興味を持つかどうかをモニターする必要があり、一方、聞き手は、語り手が私的な経験を語りたいのかどうかを知る必要があるとしている。この問題を解決する方法として、「部分的報告」という方法が語り手によって取られていることを指摘する。そして語り手は、経験の一部分を報告することによって「『まだ語りうることがある』ことを示しつつも、それをさらに語る機会を与えるかどうかを聞き手の選択に委ねることができる」(串田 2006:221)と述べた。聞き手は、その部分的報告に対して、笑いや理解のあいづちを打ったりすることによって、語り手が続けて語り始めれば、それは語り手が語りたかったものだけということ、聞き手はモニターすることができるのである。

この私事語りの開始における興味の相互的モニターのやりとりの連鎖は、本研究の自己開示からはじまる連鎖構造と多くの類似点があるといえる。話し手の部分的報告や、「あの一」や「ちょっと」といった表現、あるいは所々でポーズを伴い、聞き手の反応を待つといったことが考えられる。または、会話参加者双方が意見を持ちうることによる再帰的な連鎖構造も考えられる。つまり、会話参加者双方の意見が同じか異なるかによってすりあわせるやりとりである。しかし、話し手自身の情報や意見を相手に知らせようとする場合には、知らせようとする動機が相手に理解される必要がある。

知らせようとする動機とは、典型的には知らせようとする事柄に対する話し手の評価や感

情である。その評価や感情によって、その事柄が話し手ににとって有意義なものであり、相手に伝えるべきこととして選択されるということである。したがって、話し手は知らせようとする事柄の動機が聞き手に理解されるまで自己開示を終了せず、聞き手からの確な反応が見られない場合には、自己開示の方法や形を変えるなどし、再度聞き手に理解してもらえるように試みるのである。

このように動機が理解される必要があるという特徴は、ナラティブ研究において指摘されてきたことでもある。ナラティブとは、「時間的に異なる二点、あるいはそれ以上の点から成り、実際に起こった過去の経験を起こった時間的な順に沿って言語表現をすること」と定義されている(Labov 1972:359-360)。そこでは、ナラティブにおいては、出来事の内容だけでなく、出来事に対する評価がその語りの動機として明らかにされなければならないとしている。聞き手にとって価値がある情報でない限り、それが聞き手にとって新しい情報であるとしても、語り続けるには難しいのである。

以上のように、質問からはじまらない連鎖構造として、自己開示の部分的報告を中心に見た。部分的報告には、興味の相互的モニターのやりとりの連鎖や、知らせようとする動機、そして出来事に対する評価が分析において、重要な観点であることがわかる。

2.3. 日本語母語話者の会話スタイルについて

日本語母語話者の会話のスタイルの一つとして、会話の参加者同士で共感を示しあいながら会話を一緒に作っていく「共話」がある。これは、欧米的な「対話」²⁾に対置させた見方であり、「ひとつの発話を必ずしもひとりの話し手が完結させるのではなく、話し手と聞き手の二人で作っていくという考え方にもとづいた」(水谷1993:6)話し方である。共通の理解を前提とし、話し手と聞き手ははっきりと分かれず、双方が互いに発話をしながら協働で作らされていく会話の特徴である。例として、あいづちやそれを促すポーズ、言いさしなどの非完結型文形式、話し手の心理状態を表明するフィラーや感動詞などがあげられる。また同意を表す「ね」のように聞き手の知識状態についての話し手の把握の仕方が示される終助詞が存在することなども、共話的な話し方を補強する日本語の特徴であるとされる。

このような「共話」は日本語の大きな特徴であり、その使用傾向が強いと言われるものの、実際の会話では必ずしも終始「共話」の形で貫くとは限らず、「対話」に切り替えることもある。これについて水谷は「共話」は「発言は相手と共同で作るものであって、自分

2) 「対話」とは、話し手が自分の意見や考え方を前面に出し、「です」や「ます」で発話を完結し、聞き手も発話が終わるまで待つような会話参加者間の意思疎通を目的としない話し方であると言える。

ひとりで作るものではない」と述べており、ある程度共通の地盤を持った、気楽な話し方であるからこそ成立可能であると指摘している。また、方言談話とインタビュー番組の会話資料を対照した黒崎(1995)によると、フォーマルなインタビュー番組の場面での気のおける者同士の会話では、「共話」使用の傾向が減ったという結果から、「共話」の使用は、場面と話者間の親疎関係の制約を受けていると示唆している。つまり、初対面の雑談を扱う本研究から、「共話」という日本語会話の特徴は現れにくいことがわかる。この「共話」と「対話」の切り替えについて水谷は、前者は「共通理解を前提とし、いちいち相手の意思を確かめながら話す」ことであり、後者は、「相手との共通理解を前提とせず、相手の賛同や同感をとくに期待せず、しかも自分の意思や意見を相手に理解させることを目的として話す」こととしている。³⁾

黒崎の研究では、「共話」成立の二大要因として、「すべてを言い尽くさず、相手に発話完結の機会を与える」話し方と「発話完結の前に理解と共感の情を言葉で表す」聞き方をあげており、「共話」の機能としては、「共話」の形を利用した問いかけ表現が、意識的に相手との共感的な雰囲気高めめるのに効果的な表現であり、一種の気配り表現と使用されているとしている。

以上、先行研究から、一般に部分的報告からはじまる連鎖構造として、「共話」スタイルが見られるが、本資料である初対面の雑談では現れにくいことがわかる。

本研究は、初対面の雑談における質問からはじまらなかった連鎖構造として、自己開示である部分的報告からはじまる連鎖構造を中心に分析する。分析にあたっては、興味の相互的モニターのやりとりの連鎖や、知らせようとする動機、そして出来事に対する評価、そして共話という観点分析を試みる。

3. 分析資料および方法

3.1 分析資料

本研究では、雑談の分析をするにあたり、日本語母語話者間の初対面男女の雑談に

3) 嶺川(2001)の研究では、共通理解を求めない場合であっても、自分の見解に対する自信のなさや相手との見解の対立を鮮明にしたくない場合はあえて「共話」に切り替えることもあるとしている。そして、自分の見解に対する自信の表れ、相手との見解を鮮明にしたい時に「対話」的な話し方を取るという使い分けを行っているとしている。

限ってデータ収集を行った。これは、友人同士の雑談と比べて、初対面の会話の方が話題が限定され、使用率の高い連鎖構造が現れるのではないかと考えたからである。そのため、性別も男女のものにした。ただし、雑談とは初対面だけに関わらず幅広いため、本研究のデータだけで、雑談一般について論じることはできない。

また、調査協力者として、20代から30代に設定した。会話データを用いた研究では大学生同士の会話がデータとして用いられることが多いが、大学生の会話だけをみるのはデータとして偏りがあるのではないかと考え、様々な経歴で社会人として生活している20-30代、大学生や大学院生も含めて調査協力者とすることにした。

本研究のデータ収集の方法として、録音協力者同士面識がないように、いくつかのグループから男女の組になるように選び、協力をお願いし、10件録音を行った。録音方法としては、静かな場所に行き、テープレコーダーを設置し、30分以上自由に話してもらい、約35分後にテープレコーダーを回収した。回収した音声データは、すぐに文字化を行い、さらに文字化したものを別の人が確認し、10件のデータをそろえた。本研究で用いる資料は、総録音時間数約352分、総発話数5142であった。本研究の初対面会話の資料データを<表1>に示す。文字化の方法は、曹英南(2013)にしたがった。

<表1> 初対面会話の資料データ

データ	会話参加者 (年齢/性別)		録音時期	録音時間	発話数
(a)	A(28/女性)	B(31/男性)	2011年10月	約38分	770
(b)	C(36/男性)	D(31/女性)	2011年12月	約41分	597
(c)	E(20/男性)	F(23/女性)	2014年1月	約33分	399
(d)	G(38/男性)	H(22/女性)	2013年12月	約33分	475
(e)	I(24/男性)	J(28/女性)	2014年1月	約33分	382
(f)	K(28/男性)	L(23/女性)	2014年3月	約33分	457
(g)	M(25/男性)	N(24/女性)	2014年1月	約32分	653
(h)	O(33/女性)	P(21/男性)	2013年12月	約35分	622
(i)	Q(20/女性)	R(28/男性)	2014年2月	約37分	384
(j)	S(29/男性)	T(20/女性)	2014年2月	約37分	403

3.2 分析方法

話題の問題として、その範囲が挙げられる。話題の開始、終了は、明らかな話題転換マーカーや、沈黙があれば認定しやすい。しかし、自然に話題が展開していく場合は、認定づけが困難である。そこで本研究は、発話一つ一つを連ねていき、それを話題と仮定する。そして、話題開始の

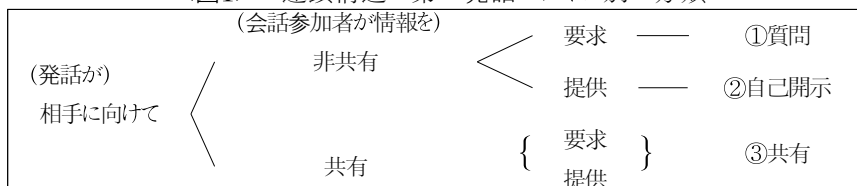
認定として、Schegloff & Sacks(1973)の隣接ペア(adjacency pair)を参考に、会話参加者一方が情報の所有者である場合は、情報要求ではじまるものと、情報提供ではじまるものとする。そして、共有している情報を扱う場合は、情報要求および情報提供からはじまるものとする。

本研究の分析資料は、初対面の雑談である。初対面とは、お互いの情報が著しく少ない状況と言える。よって、話し手は自分の情報を与えたり、聞き手の情報を引き出す必要がある。張良光(2015b)では、情報要求、つまり質問からはじまる連鎖構造として扱ったため、今回は情報提供(自己開示)からはじまる連鎖構造を中心に分析をおこなう。

分析にあたっては、筒井(2012)の分析の枠組み、そして장양광(2013)、花村(2014)を参考にした張良光(2015a, 2015b)の分類を使用する。

本研究で扱った資料に表れる連鎖構造の第一発話のタイプ別の分類および発話例を、<図1>、<表2>に示す。①質問は、相手の情報を得ようとする情報要求などの質問からはじまるものであり、②自己開示は、まず自分の情報から開示する情報提供などからはじまるものである。③共有は、会話参加者が共有している情報を扱うものであり、共有している情報であるため、それを要求あるいは提供しても、結局どちらも確認作業となるため、まとめた。

<図1> 連鎖構造の第一発話のタイプ別の分類



<表2> 連鎖構造の第一発話のタイプ別の発話例

① 質問	<情報要求>	「専攻は何なんですか？」
	<語り要求>	「どうでした?10ヶ月？」
	<意見要求>	「めんどくさくない?勉強するの？」
② 自己開示	<情報提供>	「いやなんか俺りゃ、なんか友達が外人が多いんすよ」
	<語り>	「なんすか俺が、あれはった飲食店で働いてたんですけど一本八幡にその系列のお店があつて」
③ 共有	<想起要求>	「え、さっき高校のとき、その、なんでしたっけ英語の?国際あー?」
	<語り>	「なんか時代は変わってもなんか同じ、見るものは同じ、は一でも男女の喧嘩も、よく道端で、見ますよね?」
	<意見提示>	「(沈黙6秒)きついですよね」

さらに本研究は話題の下位分類として、話題の対象について分類する。それが会話している現場なのか、外なのか、また人物なのか事物なのかを考慮し、会話参加者(会話に参加している)と第三者(会話に参加していない者)、そして事柄と分類した。その結果、参加者を対象にした話題は、まず時間軸に「経験(過去)・状況(現在)・予定(未来)」、名前や年齢、出身などの「プロフィール」、きっかけなどの「理由」、韓国語や料理などの「能力」、それに「習慣」、「好み」と大きく8つに分類された。第三者を対象にした話題は、4分類でき、事柄を対象にした話題は、54個認められ、そのうち「場所」、「文化」、「学校」関係が多くみられた。

自己開示の連鎖構造は、意見提示、情報提供、語りなどが対象に挙げられる。そこで、本研究は意見提示系を<意見/評価提示>、情報提供・語り系を<部分的報告>とし、出現率の高かった<部分的報告>からはじまる連鎖構造を中心に分析を行う。4)

4. 分析結果および考察

4.1. 部分的報告からはじまる連鎖構造について

部分的報告からはじまる連鎖構造は、話し手による情報提供や語りによって連鎖が開始され、聞き手がその情報提供に対して、先を続けることを妨げないような反応(評価や笑いなど)を送ると、話し手はさらに情報提供や語りを続け、聞き手は理解や評価、共感などを示すということを繰り返すことによって話題を構成していくものである。したがって、話し手は最初の情報提供において、自分のその情報に対する評価や感情などを表現し、その情報が話し手にとってどのような意味を持つのかを聞き手に提示する必要がある。また、聞き手に期待されることは、話し手のその事柄に対する評価や感情を理解し、話し手の期待する反応を送ることである。

4.1.1. 情報提供-理解/評価

まず、部分的報告からはじまる連鎖構造の一般的な形を見る。次に示す会話例1は、直前の話題との関連で【現在の住まい】の話題が提出される例である。会話例1では、

4) 自己開示からはじまる連鎖構造の第一発話の<意見/評価提示>と<部分的報告>の出現率を調査した結果、<意見/評価提示>は27%、<部分的報告>は59%、<その他>が14%であった。

会話参加者Bが会話参加者Aの現況についての会話を受けて、【過去の住まい】について話している。この事例の直前では、会話参加者Aが現在ワンルームに住んでいるという会話があり、そして家賃について競争率が高いという評価がなされている。431Bの「僕も前ここの辺住んでたんですよ」という発話によって、「現在の住まいがある地域」は、「地域」という話題の核として固定され、その続きにBが地域に関する過去の【経験】を話しはじめる。

＜表3＞ 会話例1

発話番号	発話内容 ⁵⁾	発話機能
429 B	##この辺は一競争率がー	
430 A	ねー高いですからねー	
431 B	僕も前ここの辺住んでたんですよ	情報提供(部分的)
432 A	あそうなんです[かー]	理解
433 B	★あの一ここの一韓国語教育センターでしたっけ韓国文化教育センターかという[ところで一まーつまりオハクタン(어학당, 語学堂)ですね/で一韓国語勉強してたんですよ[よん6カ月ぐらいいそ の時にこの辺の一あの一下宿に住んでました	情報提供(説明) ⁶⁾
434 A	★ふーんええ☆えええー★ふーん	理解
435 A	あーごはんも出てくる一[所ですね	確認要求 ⁷⁾
436 B	★そうそうです、まおいしくなかったですけどー	確認提供+評価
437 A	あそうなんですかー(あははは)	理解
438 B	おばさんが最悪の下宿に	続確認提供
439 A	ええーっ	評価

話し手Bは、431Bで「僕も前ここの辺住んでたんですよ」という同じ地域に住んでいたことがあることを聞き手Aに部分的に情報を提示し、聞き手Aは432Aで「あそうなんですかー」とこの情報に対して理解を示している。そして、話し手Bは433Bで引き続き具体的に説明をし、436Bの話し手の知らせようとする動機がわかるまで続いた。これは、先述したよう

5) 文字化方法(曹英南 2013)

① 発話の単位：話者が交替するたびに改行する。

② 同時発話の場合、以下のように記入。

例) A発話：そんなこと[ないし]。

B発話：★乗れよ。

※ A発話の「[」の「ないし」とBの「★」の「乗れよ」が重複していることを意味する。

③ 疑問文(上昇調)：「？」をいれる。④ 言い淀み：「…」をいれる。⑤ 笑い：[笑いながら][二人で笑い][はははは]で記す。⑥ 聞き取り不能：「####」をいれる。⑦ プライバシー保護：名前や学校など固有名詞は明記しない。⑧ ポーズ：[少し間]または[沈黙 2秒]で示す。

6) 情報提供(説明)とは、部分的に提供された情報を具体的に説明する部分。

7) 確認要求とは、共有している(であろう)情報を要求するものである。

に、聞き手Aがその部分的報告に対して、笑いや理解のあいづちを打ったりすることによって話し手Bが続けて語り始めれば、それは話し手Bが語りたかったものだということを聞き手Aはモニターしている様相と言える。このような興味の相互的モニターのやりとりの連鎖は、基本的な部分的報告の連鎖構造として認められた。また、〈確認要求-確認提供-理解/評価〉という確認連鎖が至るところで見られた。

この基本的な連鎖構造をまとめると、以下のようになる。

<連鎖1>

01A：情報提供(部分的)

02B：理解

03A：情報提供(説明)

04B：理解

05A/B：確認要求

06B/A：確認提供

07A/B：理解/評価

← 確認連鎖

<連鎖1>は、話し手の情報提供に対して聞き手が理解を表すと、話し手が引き続き情報を説明し、聞き手が理解を表すという基本的な連鎖である。また、〈確認要求-確認提供-理解/評価〉という確認連鎖は、情報提供後に挿入されることが多く、さらに確認連鎖が連続するなどの拡張がみられる。

次に示す会話例2は、直前の話題との関連で【ローマ字】の話題が提出される例である。会話例2では、会話参加者Bの将来についての会話から、「だってろれ、俺ローマ字読めない、かったんすよこいっ」と会話参加者Bの【能力】について話している。この事例の直前では、会話参加者Bが「体育の教員になりたい」という会話があり、そして会話参加者Bが「勉強してないから馬鹿だ」という発話に笑いながら「そんなことないですよ」という不同意表明がなされている。会話参加者Bの「だってろれ、俺ローマ字読めない、かったんすよこいっ」という発話によって、「勉強できない程度」が「ローマ字が読めない程度」となり、ローマ字が話題の核として固定される。そして、会話参加者Bが自分自身の【能力】について話しはじめる。

<表4> 会話例2

発話番号	発話内容	発話機能
414B	★でも体育の教員ですよ、いまですっ体育しかやってきてないから、まったく勉強してないから馬鹿なんですよ	
415A	あははは(笑い)そんなことないよ	
416B	だってそれ、俺ローマ字読めない、かったんすよこいつ	情報提供(部分的)
417A	まじで?	継続支持 ⁸⁾
418B	で俺うっ打てないん、ですよ、なんかそのっちっさいシャとくシュ、シュとかなんか[あるじゃないですか、y 入ると全然解んなくなっちゃって	情報提供(説明)
419A	★うんうん	理解(あいづち)
420A	まじで?	継続支持
421B	だから韓国語もローマ字でこう書かれるじゃないですか最初	情報提供(部分的)
422A	あっ私もそれはわかんないちょっと	共感
423B	んっろっでえー?ってなる、わかんねえみたいな	情報提供(説明)
424A	ローマ字表記されたらわかんないよお、えーまじで、それちょっと[よい###	共感
425B	★だから俺、ほんとにキーボードとかうつの(沈黙3秒)さっ、なんだっけな?(少し間)サッカーとかも(沈黙2秒)おお、うっ打てないっす、どうやってうったらしいかわかんないっす、あローマ字で	情報提供
426A	まじで?	継続支持

話し手Bは、416Bで「だってそれ、俺ローマ字読めない、かったんすよこいつ」というローマ字が読めないことを聞き手Aに部分的に情報提示し、聞き手Aは417Aで「まじで?」と継続支持を示している。そして、話し手Bは418Bでローマ字が読めない根拠を具体的に説明をはじめ、419Aで理解のあいづちをうち、420Aで「まじで?」とこの情報に対して再度継続支持を示す。このように、部分的報告に対して継続支持を示すことによって、話し手Bが続けて語り始めれば、それは話し手Bが語りたかったものだという事を聞き手Aはモニターしているのである。

このような興味の相互的モニターのやりとりの連鎖は、基本的な部分的報告の連鎖構造として認められる。そして、話し手の情報提供に対して聞き手は理解/評価/共感を示すとこの連鎖が連続していく様相が見られた。

この会話例2の連鎖構造をまとめると、以下のようになる。

<連鎖2>

01A：情報提供(部分的)

8) 継続支持とは、「語りが『まだ続く』と見なしうるとき、『続きを聞く用意ができてい』ことを示す」(申田2009:13)発話である。

- 02B：継続支持
- 03A：情報提供(説明)
- 04B：理解、継続支持
- 05A：情報提供(部分的)
- 06B：共感
- 07A：情報提供(説明)
- 08B：共感

まず01Aが部分的情報提供をし、02Bが継続支持を示すと、03Aで根拠を具体的に説明しはじめる。04Bでまた継続支持を示すと、05Aでまた部分的情報提供をする。05Aの部分的情報に対し、06Bは共感を示す。これもまた興味の相互的モニターのやりとりの連鎖であり07Aの情報提供(説明)、08Bの共感と続く。

4.1.2 情報提供-理解/評価(確認挿入連鎖)

会話例1、会話例2は確認連鎖が理解や評価、共感のあとに続いた事例を見た。次に示す会話例3は、確認連鎖が挿入された事例であり、直前の話題との関連で【Dさん】の話題が提出される例である。この会話例3では、会話参加者Aの研究室についての会話から、「あの一誰だっけな一人ね一ミクシー(mixi)で一ちょっと知り合いになった人がいたんですよ」と【Dさん】について話しはじめる。この事例の直前では、会話参加者Bが会話参加者Aに「研究室に日本人は多いのか」という質問からはじまる会話があり、そして会話参加者Aが「半分程度が日本人だ」という応答をする。そして、181Bで「あの一誰だっけな一人ね一ミクシー(mixi)で一ちょっと知り合いになった人がいたんですよ」という部分的な情報を提供する。この「誰だっけな」という発話によって、聞き手も知っているかもしれない共通の人物が対象となり、【Dさん】についての情報が提供され続ける。

<表5> 会話例3

発話番号	発話内容	発話機能
179A	★ <u>半分</u> 一はいないかな私の研究室は結構多い一[ですね一ほとんど一女性で一/ま日本人もすごく多い一[ですね一	
180B	★あ一☆はい	
181B	★ <u>あの一誰だっけな一人ね一ミクシー(mixi)で一ちょっと知り合</u>	情報提供(部分的)

182 A	いになった人がいたんですよー 一般の方でーです[かー?]	[確認要求 確認提供
183 B	★ <u>男の一人</u> でーDさんなんかいませんか?	
184 A	Eですか?	+ 確認要求
185 B	Eさんかー	[確認要求
186 A	(笑い)(笑いながら)Dー	確認提供
187 A B	(二人で笑い)	笑い(納得)
188 A	(笑いながら)Eさんですね	笑い
189 B	(笑い)	笑い
190 A	あー[ーーー]	
191 B	★あーはい何かねーこっちに入る前にー一般大学院かー教育大 学院どっちに[しようかって悩んでいてーで相談したことがあるんです よー[なんか、なんかどうしたらいいでしょうかみたい[な文章、なん かオンラインで[あげたらー、なんかねコメントしてくれた人がいて	情報提供(説明)
192 A	★えええー★あーー★ええええー★うんうんー	理解
193 A	Eさんです[ね]	納得

話し手Bは、181Bで「あの一誰だっけなー一人ねーミクシー(mixi)でーちょっと知り合いになった人がいたんですよー」と発話することによって、聞き手Aも知っているかもしれない共通の人物(Dさん)がいるのではないかという興味をしめさせる。したがって、聞き手Aがその「誰か」についての情報を要求し、知人のなかで知っている人がいるのか探すようになる。こういった行為は、不確実性減少理論(uncertainty reduction theory)を扱ったBerger & Calabrese(1975)によれば、人は未知の他者と出会った場合、その他者に対する不確実性を減少させ、予測可能性を増加させるように動機づけられるとしている。つまり、不確実な状態を好まず、その不安を減少させるようになるということである。よって、知人のことでもあるかもしれない「誰か」について、聞き手はそれを明確にしたいため、確認要求していくのである。それは、不安な状態がある程度おさまるまで繰り返されるため、確認連鎖が挿入されていくと考えられる。そして、誰かがDさんであることがわかり、納得を迎えるのである。このような確認連鎖は、基本的な部分的報告の連鎖構造の至るところで認められた。

この会話例3の連鎖構造をまとめると、以下のようになる。

<連鎖3>

01A：情報提供(部分的)

02B：確認要求

03A：確認提供

04B：納得

05A：情報提供(説明)

06B：納得

まず01Aが聞き手も知っている(かもしれない)であろう部分的情報を提供するが、それが聞き手にとって確信が持てない情報であるとき、不確実な情報はその不安感を減少させるため、02Bで情報の確認を要求する。そして03Aは、その不安を減少させる確認要求に答え、納得を迎える。そして<確認要求-確認提供>は、ある程度不確実な状態がおさまるまで続いていく。

4.1.3 情報提供-理解/評価(共話)

次に示す会話例4は、話し手と聞き手という役割が交代しながら、情報を提供し合っていく事例であり、直前の話題との関連で【Bの現況】の話題が提出される例である。この会話例4は、会話参加者Aの【予定】についての会話から、「うん(少し間)スカイプとか、友達いっぱい作って韓国語でしゃべる,ようにしたほうが文章はなんかいっぱいやるから,大丈夫,なんか喋られなくなった」と【Bの現況】について話しはじめる。

この事例の直前では、会話参加者Bが会話参加者Aに「あとどのくらい(韓国に)いる予定なんですか?」という質問からはじまるAの【予定】についての会話がはじまり、帰国まであまり時間がないため、もっと勉強しないといけないという会話になる。そして、会話参加者Aが「忘れちゃうんですよ」と発話し、会話参加者は共感する。86Bではじめて「韓国語」という用語が表れ、「うん(少し間)スカイプとか、友達いっぱい作って韓国語でしゃべる,ようにしたほうが文章はなんかいっぱいやるから,大丈夫,なんか喋られなくなった」という部分的な情報を提供する。それまで共感していた語学の勉強についてのことが、会話参加者Bの現況を話す「韓国語でしゃべる」という発話によってさらに対象がしぼられ、その後、会話参加者双方から情報が提供され続ける。

<表6> 会話例4

発話番号	発話内容	発話機能
84B	★いや,帰ったらね,すぐ[忘れるらしいから	
85A	★うふふふ(笑い)そうなんですよ	
86B	うん(少し間)スカイプとか,友達いっぱい作って[韓国語でしゃべる,ようにしたほうが[文章はなんかいっぱいやるから,大丈夫,なんか喋られなくなった	情報提供(部分的)
87A	★あー ★いいですね	理解,評価

88A	そうですね,単語を忘れていくって言っていました	共感+情報提供
89B	単語はね全然覚えてない,ふふ(笑い)うん,6月,去年のろっあっ?去年の6月まで学校いってて[1年間(少し間)でも友達みんな1年で帰っちゃって[んっかん一まっ全然いなくて,もっこっ今一ちょっサッカーの集まりで,まっここにきてて[サッカーの友達しかいなくていま一(少し間)[でみんな日本語上手だから,あははは(笑い)まっ,実力上がることはない	情報提供(説明)
90A	★はい ★あー ★はい ★あー	理解
91A	ふふふ(笑い)難しいですよ,私もその語学堂って離れてるんですけど,その学校の中にあっても[別の館みたいになってるんで韓国人全くないんで	情報提供(説明)
92B	★あー?んーそっかそっか	理解
93B	住んでるところとかに,いない?韓国人	確認要求
94A	いや,居るんですけど,いやー	確認提供
95B	あっ仲良く,はならない?しー(息を吸い込む音)	確認要求
96A	ならないです	確認提供

話し手Bは、86Bで「うん(少し間)スカイブとか,友達いっぱい作って[韓国語でしゃべる,ようにしたほうが文章はなんかいっぱいやるから,大丈夫,なんか喋られなくなった」と【現況】を話すことによって、それまで共感したことをさらにしぼり、87Aで理解、評価のあいづちをうち、88Aで共感をしめす。そして、興味の相互的モニターのやりとりの連鎖によって89Bで、韓国語がしゃべられなくなった現況について具体的に説明をはじめ、これを受けた聞き手Aも、自身の状況を交えて情報を提供する。

この会話参加者がお互いの状況を同じものとして認め合うという会話は、串田(2006)で論じられている、共通経験を語り合うやりとりと同種のものと言える。串田は、一人が自分の経験を語ると、他の会話参加者が「あ、わかるそれ、うちも」と言って、自分にも共通の経験があることを主張する例を挙げている(串田2006:235)。このような方法は、現況の意見/評価提供のかけ合いの中にも見られ、【現況】の話題は、それに加えて同じ心情を抱いていることを確認し合うという作業が加わったやりとりとも言える。

この会話例4の連鎖構造をまとめると、以下のようになる。

<連鎖4>

- 01A：情報提供(部分的)
- 02B：理解、評価、共感+情報提供
- 03A：情報提供(説明)
- 04B：理解

05B：情報提供(説明)

06A：理解

01Aと02Bの後に05Bと06Aが続いたり、04Bの後に01Aと02Bが現れてから05Aと06Bの隣接ペアへ続いたり、01Aと02Bのみで終わったりする例などが見られた。

4.2. 言語形式について

部分的報告からはじまる連鎖構造の言語形式としては、情報提供の発話においては、「なんか/ちょっと/みたいな/やっぱり/-けど」などのように、断定的な発話を避け、発話内容の曖昧さを表現しているものが多い⁹⁾¹⁰⁾。このような表現は、「垣根表現」や「迂言的表現」などともされるヘッジ(hedges)として、ポライトネスの観点から、発話態度を緩和させる有効な言語的手段であることが指摘されている(Holmes 1995; Fraser 2010)¹¹⁾。

初対面会話データをもとに包括的な分析を行ったLauwereyns(2002)は、ヘッジを「不確かさや可能性、ためらい、近似性を言語的に表現する曖昧表現」(Lauwereyns 2002:239)と定義づけ、発話文末、副詞句、接続詞、接辞に出現する26種の言語形式について考察した。その結果、「とか」、「思う」、「かな/かしら/かね」、「～たり～たりする」、「みたい/よう」が上位5位までを占めたとしている。入戸野(2004)は、形式と機能の観点から分析した結果、形式については語彙的ヘッジが全ヘッジの80%以上を占め、助詞、間投詞、副詞が上位3位を占めたと報告している。一方、機能については、「正確な情報を伝達したい」という意思表示機能は約20%、「人間関係を向上させる」機能は約80%を占め、およそ4倍の差が表れたことを報告している。

話し手が部分的に情報を提供することは、発話自体に曖昧さが伴っている。そのため、

9) なんかの意味用法を研究した渡辺によると、「ある時点において、話し手にとって不定・未知であるか、そのように見える対象を、そのままに叙述する表現であり、対象をあいまいで非限定的に表現することができる」と述べている。(渡邊 1997:59)

10) 日常会話の「みただ」について分析を行った大曾によると、「状況の周縁的な用法で、明確に言いきるのではなく、言いたいことをぼかして言う形式である。厳密な意味ではなく、おおよその意味を伝えるのに便利な、会話向きの形式であるとも言える。会話は計画性がなく、推敲の時間もない。「みただ」でぼかすことによって厳密さに欠けることを相手に示すことができ、時には責任逃れをすることもできる」と述べている。(大曾 2007:82)

11) ヘッジの定義は、その文脈的依存性の高さから機能と結び付けて述べられることが少なくないが、その定義や分析対象は研究領域や研究者によって異なる。「ヘッジ」という用語を導入したG. Lakoffは、「暗黙のうちにその意味が曖昧さを含意する語、物事をより曖昧に、または曖昧さを軽減させる語」(G. Lakoff 1973:471)と定義した。

ヘッジ表現が多く表れたと考えられる。話し手の情報提供が聞き手にとっては曖昧な発話であっても、興味の相互モニターや『続きを聞く用意ができてい』ことを示す継続支持を示す。しかし、ヘッジ表現は不確実性を相手に与える表現とも言える。それが、聞き手を不安にさせるような不確実性の強い発話である場合、聞き手は不確実性を減少させるために情報確認を要求するのである。

また、理解の発話は「うん、はい、そう」、評価の発話は「すごい/いい/うそー/へえー/[笑い]」などの形容詞や、「うそー/ほんと?/そうなの?」などの継続支持、共感の発話は、「～も/～よ/～よね」などが表れた。

本資料から現れた言語形式をまとめると次の<表7>のようになる。

<表7> 部分的報告からはじまる連鎖構造の言語形式

情報提供	「なんか」「ちょっと」「みたいな」「やっぱり」「V-よ」「-と思う」「V-て」「-けど」
理解	「うん」「はい」「そう」
評価	「すごい」「いい」「へえー」「[笑い]」
継続支持	「ほんと?」「そうなの?」「うそー」
共感	「-も」「-よ」「-よね」

5. おわりに

本研究は、雑談もほかの会話と同じように、会話の一種としてみた。そして、会話の規範や規則を明らかにするため、発話の連鎖構造をつくり、発話の連鎖パターンから分析をおこなった。そこで、分析の対象となる範囲として発話一つ一つを連ねていき、それを連鎖構造として話題と仮定した。そして、話題開始の認定として隣接ペアの概念と情報のなわばり理論を参考に、会話参加者一方が情報の所有者である場合は、情報要求ではじまるものと、情報提供ではじまるものとした。そして、お互いが共有している情報を扱う場合は、情報要求および情報提供からはじまるものとした。

また、自己開示を「相手の情報を収集する方法の一つとして、自ら自分自身について相手に話すことをさし、自分自身の情報を他者に対して示していくこと」とし、質問のような情報要求とは違い、話し手自身の持っている情報や意見、評価を聞き手である相手に伝えようとする発話によってはじまるものとした。そして、自己開示を質問という、相手から自分の知

らない情報や意見を引き出そうとする発話との対比において捉え、話し手自身が選択した話題内容を自発的に聞き手に提示する発話とした。研究対象として、部分的報告からはじまる連鎖構造を中心に分析を行った。

その結果、まず、部分的報告からはじまる連鎖構造の一般的な形は、話し手の情報提供に対して聞き手が理解を表すと、話し手が部分的な情報を具体的に説明し、聞き手がまた理解を表すという基本的な連鎖であった。また、部分的報告に対して、継続支持を示すことによって、話し手に語らせ、その後聞き手は話し手の発話に共感を示しても同じように会話は流れた。話し手の情報提供に対して聞き手は理解/評価/共感を示すと、この連鎖が連続していく様相が見られた。

次に、確認連鎖が挿入された連鎖構造について分析した。その結果、聞き手が話し手の不確実な情報提供によって不安な状態になり、聞き手はその不確実性を減少させるため、確認連鎖があらわれたことがわかった。このような確認連鎖は、基本的な部分的報告の連鎖構造の至るところで認められた。

そして、話し手と聞き手という役割が交代しながら、情報を提供し合っていく連鎖構造を分析した。その結果、話し手が現況を話し、それに共感することで聞き手も、自身の状況を交えて情報を提供することがわかった。これは串田(2006)で論じられている、共通経験を語り合うやりとりと同種のものと言える。

最後に言語形式について分析した。その結果、部分的報告からはじまる連鎖構造の言語形式としては、情報提供の発話においては、「なんか/ちょっと/みたいな/やっぱり/-けど/みたいな」などのように、発話者の曖昧さを表現しているヘッジが多かった。また、理解の発話は「うん、はい、そう」、評価の発話は「すごい/いい/うそー/へえー/ [笑い]」などの形容詞や、「うそー/ほんと?/そうなの?」などの継続支持、共感の発話は、「～も/～よ/～よね」などが表れた。

今回は、母語話者同士の初対面での雑談を資料に分析をおこなったが、日本語教育へ応用するためには接触場面の初対面の雑談資料を扱う必要がある。また、情報提供では音調的な特徴として、声の高低でプラス/マイナスの評価や、重要な表現にプロミネンスを置くこと、さらには発話速度の変化で内容に問題があることを示したりするなど、様々な言語的、パラ言語的表現についても分析する必要がある、これらについては、今後の課題とする。

【参考文献】

- 장양광(2013) 「일본어모어화자의 화제 전개양상에 관한 일고찰 - 토론에서의 화제의 형태를 중심으로 -」 『일본문화연구』 제45집, 동아시아일본학회, pp.471-490.
- 張良光(2015a) 「初対面雑談における連鎖組織の一考察-話題の対象を中心に-」 『日本語教育』 78, 한국일어교육학회, pp.27-38.
- _____ (2015b) 「初対面雑談における連鎖構造分析の一考察-質問からはじまる連鎖組織を中心に-」 『일본문화연구』 55, 동아시아일본학회, pp.287-307.
- 曹英南(2013) 「韓国語と日本語の割り込み発話の対照研究」 『일본어문학』 제59집, 한국일본어문학회, pp.37-56.
- 大曾美恵子(2007) 「日常会話における『みたいだ』と『ようだ』-名大会話コーパスに基づく考察」 『第20回日本語教育連絡会議論文集』 Vol.20, 日本語教育連絡会議, pp.81-85.
- 大浜るい子(1995) 「談話分析雑談はいかに構成されるか」 『広島大学教育学部紀要第2部』 第44号, pp.207-21.
- 串田秀也(2009) 「聴き手による語りの進行促進：継続支持・継続催促・継続試行」 『認知科学』 第16巻第1号, pp.12-23.
- _____ (2006) 『相互行為秩序と会話分析：「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化』 世界思想社, p.235.
- 黒崎良昭(1995) 「日本語コミュニケーション：「共話」について」 『園田学園女子大学論文集』 30 (I), pp.45-60.
- 筒井佐代(2012) 『雑談の構造分析』 くろしお出版, p.6, 56.
- 入戸野みはる(2004) 「ヘッジの形とその機能 友人間の会話に見る」 南雅彦・浅野真紀子(編) 『言語学と日本語教育Ⅲ』 くろしお出版, pp.287-304.
- 花村博司(2014) 「日本語の雑談会話における話題転換研究の方法：話題転換はどこで行われ、どう分類されるか」 『言語情報編』 9, 言語文化学研究, pp.71-99.
- 嶺川由季(2001) 「大学院のゼミ談話で見られる日本語母語話者の「対話」と「共話」の使い分け」 『社会言語科学』 第3巻第2号, pp.39-51.
- 水谷信子(1993) 「共話から対話へ」 『日本語学』 4, 明治書院, pp.4-10.
- 渡邊久美(1997) 「「なんか」の意味と用法」 『広島大学留学生センター紀要』 7号, 広島大学留学生センター, pp.49-63.
- Berger, C.R., & Calabrese, R.J.(1975) Some Explorations in initial interaction and beyond : Toward a development of a theory of interpersonal communication. *Human Communication Research*, 1, pp.99-112.
- Fraser, B.(2010) Pragmatic Competence: The Case of Hedging. In K. Gunther, W. Mihatsch and S. Schneider (Eds.), *New Approaches to Hedging (Studies in Pragmatics)* , Bingley:Emerald Group, pp.15-34.
- Holmes, J.(1995) Soft and low: Hedges and boosters as politeness devices. In J. Holmes, *Women, men and politeness*, London: Longman, pp.72-114.
- Labov, William.(1972) The transformation of experience in narrative syntax. In *Language in the Inner City*. Chapter 9. Philaderphia: University of Pennsylvania Press. pp.354 - 396.
- Lakoff, G.(1973) Hedges: A study in the meaning criteria and the logic of fuzzy

concepts. *Journal of Philosophical Logic*, 2(4), pp.458-508.

Lauwereyns, S.(2002) Hedges in Japanese conversation: The influence of age, sex, and formality. *Language Variation and Change*, 14(2), pp.239-259.

Schegloff E, A, Sacks H(1973) "Openingupclosings", *Semiotica*8, pp.289 - 327.

논문 투고 일자 : 2016.03.16.

논문 심사 일자 : 2016.04.18.

게재 확정 일자 : 2016.04.28.

 < 要旨 >

初対面での雑談における連鎖構造分析の一考察

—部分的報告から始まる連鎖構造を中心に—

張良光

本研究は、雑談を会話の一種として捉え、会話の規範や規則を明らかにするため、発話の連鎖組織をつくり、発話の連鎖パターンから分析を行った。方法としては、発話ひとつひとつを重ねていき、それを連鎖組織とし、話題と仮定した。そして、会話参加者の一方が情報の所有者である場合は、情報要求で始まるものと、情報提供で始まるものに分類した。また、自己開示を「相手の情報を収集する方法の一つとして、自ら自分自身について相手に話すこと」とし、情報提供から始まるものを自己開示から始まる連鎖構造とした。自分自身の情報を利用し、自己開示から始まる連鎖構造を<意見/評価提示>と<部分的報告>に分類し、このうち部分的報告から始まる連鎖構造を中心に分析を行った。

その結果、話し手の情報提供に対して聞き手が理解/評価/共感を示すと、話し手は部分的な情報を具体的に説明し、聞き手がそれにまた理解を表すという様相が見られた。次に、確認連鎖が挿入された連鎖構造について分析した結果、聞き手は話し手の不確実な情報提供によって不安な状態に陥り、聞き手はその不確実性を減少させるため、確認連鎖が現れるということがわかった。そして、話し手と聞き手という役割を交代させながら、互いに情報を提供し合う連鎖構造を分析した結果、話し手が現況を話し、聞き手がそれに共感しつつ、自身の状況を交えて情報を提供するということが明らかになった。また、言語形式について分析した結果、情報提供の発話においては、発話内容の曖昧さを表すヘッジ(hedge)が多く現れた。

 A Study of the Chain Structure Analysis in the First Meeting Conversation
 -Focusing on the Sequence Organization Starting from the Partial Information-

Chang, Yang-Kwang

This study considers small talk as a sort of communication. To discover small talk's norms and rules, the organization of utterance sequences were established to analyze utterance sequence patterns.

As a result, when a listener shows understanding/, evaluation/, or sympathy toward a speaker's provision of information, a speaker tends to give detailed information and helps the listener understand. Next, as a consequence of analyzing sequence organizations with implanted sequence confirmation, a listener tends to show sequence confirmation to reduce unclearness that comes from a speaker's uncertain provision of information.

When the analysis of sequence organization provides information of switching roles of a listener and speaker, the tendency, to which a speaker talks about recent stuff while a listener sympathizes and provides back information with the listener's own recent small talk, was discovered. Finally, as a result of analyzing about language form, there are numbers of hedges to describe a speaker's ambiguousness in utterance of provision of information.